

第3回
男声合唱
ジョイントコンサート

SINGERSなも

男声合唱団「昴」

クール・ジョワイエ

男声合唱団「響」

東海メールクワイア

グランフォニック

2013 3/17 [日] 愛知県芸術劇場コンサートホール

主 催：男声合唱ジョイントコンサート実行委員会
後 援：愛知県合唱連盟、朝日新聞社

第3回男声合唱ジョイントコンサート実行委員会

柴田 富造(委員長)・福本 忠弘・安藤 徳・長谷川 稔 (クール・ジョワイエ)

高垣 敏昌・澤野 比呂志 (SINGERSなも)

大池 廣・磯野 正敏 (男声合唱団「昂」)

志水 武夫・大久保 康二 (男声合唱団「響」)

鈴木 順・村瀬 輝恭・杉江 正裕 (東海メールクワイア)

細江 太喜雄・鹿住 誠 (グラントフォニック)

ご挨拶

本日はご多忙の中“第3回男声合唱ジョイントコンサート”にご来場いただき、誠にありがとうございます。

2006年6月の第1回と2009年5月の第2回は5団体でしたが、今回は東海メールクワイアさんの参加を頂き、6団体によるコンサートとなりました。

昨今の合唱界におきまして、男声合唱は残念ながらやや往時の勢いを失い、多くの団が高齢化に苦しんでいるのが現状であります。次の時代へ男声合唱の魅力を伝えてゆくと云う大きな役割もこのコンサートの目的の一つと私共は考えております。

皆様の温かいご支援の下に今後更にジョイントコンサートの輪を広げ、お互いの交流を深めつつ、音楽レベルの向上に切磋琢磨してゆく所存でございます。

今回は、公募によります一般参加団員を含む合同演奏に、全国的にご活躍著しい指揮者の伊東恵司氏をお迎えし、男声合唱の古典とも云える多田武彦作品を演奏いたします。

男声合唱の、繊細且つ力強い響きをお楽しみいただければ幸いです。

2013年3月17日

実行委員長 柴田 富造
(クール・ジョワイエ)

第3回男声合唱ジョイントコンサートの開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。当愛知県合唱連盟加盟の男声合唱団6団体が集まり、このように合同演奏会を開催できます事を大変嬉しく思います。

全日本合唱連盟でも、数年前から全日本男声合唱フェスティバルを開催しております。男声合唱団と言えば、その昔は大学合唱団の象徴でしたが、そこで味わった感動をいつまでもと、多くの方々が卒業後も素晴らしい活動をされています。幸いにも当県には、伝統ある男声合唱団が数多くあります。是非とも愛知県から男声合唱の魅力を数多く発信していただきたいと思います。また今回は合同演奏の指揮に伊東恵司氏を迎える、男声合唱の定番曲を演奏するとの事。素晴らしいハーモニーが聴けることを期待します。

最後になりましたが、このコンサートの成功と、各合唱団の発展を祈念してご挨拶とさせていただきます。

2013年3月17日

愛知県合唱連盟理事長 長谷順二

～Program～

I. SINGERSなも

「Messa a 3 voci in La minore」 Antonio Lotti 作曲

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. Kyrie | (あわれみの賛歌) |
| 2. Gloria | (栄光の賛歌) |
| 3. Credo | (信仰の賛歌) |
| 4. Sanctus | (感謝の賛歌) |
| 5. Agnus Dei | (平和の賛歌) |

指揮：橋本 慧

II. 男声合唱団「昂」

無伴奏男声合唱のための小組曲

「見よ、かの蒼空に」 石川 啄木 短歌・詩／信長 貴富 作曲

- | |
|---------|
| I. 煙 |
| II. 石 |
| III. 餡壳 |
| IV. 少年 |
| V. 終曲 |

指揮：樅山 英機

III. クール・ジョワイエ

[西村 朗 作品より]

1. 同声合唱とピアノのための組曲「夏の庭」より

「夏の庭」 佐々木 幹郎 作詩

2. 男声合唱組曲「まほろしの薔薇」より

「ひびきのなかに住む薔薇よ」 大手 拓次 作詩

3. 同声三部合唱曲

「ゆうぐれ」 大手 拓次 作詩

指揮：高橋 寛樹／ピアノ：森 恵美子

————休憩 15分————

IV. 男声合唱団「響」

男声合唱組曲

「月光とピエロ」

堀口大學 作詩／清水 僕 作曲

I. 月夜

II. 秋のピエロ

III. ピエロ

IV. ピエロの嘆き

V. 月光とピエロとピエレットの唐草模様

指揮：後藤 行央

V. 東海メールクワイア

男声合唱組曲

「残照」より

井上 靖 作詩／高田 三郎 作曲／今井 邦男 編曲

2. 凤

3. 比良のシャクナゲ

5. 残照

指揮：鈴木 順／ピアノ：津野 有紀

VI. グランフォニック

男声合唱とピアノのための

「運命の歌」(Schicksalslied)

Johannes Brahms 作曲／北村 協一 編曲

指揮：成田 正人／ピアノ：丸山 晶子

—————休憩 15分—————

VII. 合同演奏

[多田 武彦 作品集より]

1. 柳河風俗詩 「柳河」

北原 白秋 作詩

2. 草野心平の詩から 「石家荘にて」

草野 心平 作詩

3. 雨 「雨」

八木 重吉 作詩

4. 富士山 「作品第貳拾壹」

草野 心平 作詩

指揮：伊東 恵司／演奏：男声合唱6団体と公募参加者

I SINGERSなも

Messa a 3 Voci in La minore

Antonio Lotti 作曲

Antonio Lotti (1667-1740)はイタリア・ヴェネツィア生まれの中后期バロック時代の作曲家、オルガニスト。ドイツ滞在中にバッハやヘンデルと交流し、彼らにも多くの影響を与えたことで知られ、後の音楽に大きな影響を及ぼしています。あらゆるジャンルにまたがって作曲しており、ミサ曲、カンタータなど宗教曲を書く一方で、マドリガル、オペラも多数残しています。Lottiの作曲様式は、盛期バロック音楽から初期古典派音楽の橋渡しをするものともいわれます。

今回演奏するミサ曲は全曲がイ短調で書かれており、ポリフォニックな部分あり、メロディアスな部分ありと、決して単調な作りではありません。昨年11月の第21回定期演奏会では「Credo」抜きで演奏しましたが、今回は完全版で演奏します。

- | | |
|--------------|-----------|
| 1. Kyrie | (あわれみの賛歌) |
| 2. Gloria | (栄光の賛歌) |
| 3. Credo | (信仰の賛歌) |
| 4. Sanctus | (感謝の賛歌) |
| 5. Agnus Dei | (平和の賛歌) |

~Profile~



1989年、数名のメンバーで発足。以来23年、現在は20歳代から70歳代まで25名ほどのメンバーで活動。伝統的ないわゆる男声合唱曲や宗教曲、現代作曲家作品のほか、JAZZ、ポップスなどジャンルを問わず、誰もが知っている曲も歌いこなせる合唱団でありたい、そんな思いで団名を「SINGERSなも」としています。ちなみに「なも」は名古屋弁の「なも」。男声のしかも大人の男にしか出せない色気を表現することが、私たちの目指す「なもトーン」なのです。

1990年9月の第1回定期演奏会以来、合唱に馴染みのない方々にも楽しんでいただけるステージを取り入れ、ミュージカル、ビートルズナンバー、JAZZのほか、第9回定演からは、美空ひばり、山口百恵、レコード大賞受賞曲、服部良一作品、筒美京平作品、デュークエイセス「ほんのうた」等を男声合唱にアレンジ委嘱し、定演で初演し好評を得ました。加えて木下牧子先生に「わたしはカメレオン」「光る刻」を、寺島陸也先生に「ふじの山」を、大中恩先生に「ぼくのひとりごと」を委嘱初演し、男声合唱のレパートリー増加に貢献しています。

指揮者 橋本 慧



石川県出身。南山大学卒業後、愛知県立芸術大学音楽学部声楽専攻を卒業。小学校時代にコンクールで初めて合唱の舞台に立ち、高校の合唱部で本格的に合唱を始め、高校・大学で学生指揮者を務める。

「SINGERSなも」には第11回定期演奏会に入団。第20回定期演奏会後から指揮者に就任。

声楽を安田健、井原義則、高野二郎、永田峰雄の各氏に師事。

現在、愛知県立芸術大学大学院音楽研究科声楽領域2年在学中。

メンバー

T1	T2	B1	B2
池田 潔	安藤 良雄	今村 隆仁	尾関 陽一
上川 英俊	伊澤 忠男	岩本 昭人	澤野比呂志
大間 孝一	児島 宏之	鬼頭 哲司	中野 亮
佐々木鷹志	佐野 晴男	林 高弘	山田 正広
橋本 慧	高垣 敏昌	藤田 裕久	吉田 隆幸
前田 博也	吉富 孝一		
北村 秀搏	山根 慶太		

SINGERSなも CD好評発売中(レーベル: Giovanni)

1. 木下牧子男声合唱作品集 「恋のない日」 價格 2,000円
2. 木下牧子男声合唱作品集II 「虹」 價格 2,500円
3. 木下牧子男声合唱作品集III 「光る刻」 價格 2,500円

● 団員募集 ●

過去に合唱経験(混声も可)がある方 | とにかく歌が好きな方 | 練習後の飲み会が楽しみな方

一緒に歌いませんか? お気軽にご参加ください。

練習日: 毎週土曜日 午後6時~9時 会 費: 3,000円/月(学生は半額)
場 所: 金山フェールMAMI (052)253-7581 連絡先: swn164-lpg@nifty.com まで
ホームページ: <http://www.geocities.jp/singersnamo/index.html>

Ⅱ 男声合唱団「昂」

無伴奏男声合唱のための小組曲

「見よ、かの蒼空に」

石川 啄木 短歌・詩／信長 貴富 作曲

この小組曲は、岩手の合唱団コールMの委嘱を受けた信長貴富氏が、ゆかりの石川啄木の歌を選んで、2007年に作曲された。信長氏は、「啄木が吐露する男の弱さは男声合唱でしか表現し得ない。声以外の大仰な仕掛けは不要だ。」と述べている。「無伴奏男声合唱の清澄な響き」とは、日ごろ我々が追及している合唱の姿であり、その点からこの小組曲は格好のテキストであると考えた。

なお、本年は満26歳で早逝した啄木の没後101年に当たる。

I. 煙

青空に消えゆく煙
さびしくも消えゆく煙
われにし似るか

II. 石

石ひとつ
坂をくだるがごとくにも
我けふの日に到り着きたる

ふるさとの
かの路傍のすて石よ
今年も草に埋もれしらむ

III. 餘 壳

餘壳のチャルメラ聴けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

IV. 少 年

愁ひある少年の眼に羨みき
小鳥の飛ぶを
飛びてうたふを

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたった二人の家にゐて、
ひとりせっせとりイダアの
独学をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

V. 終 曲

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

*短歌はすべて『一握の砂』の「煙[一・二]」の章に所収

*詩は『呼子と口笛』に所収、原題は「飛行機」

*I～Vの曲のタイトルは信長貴富氏が付したもの

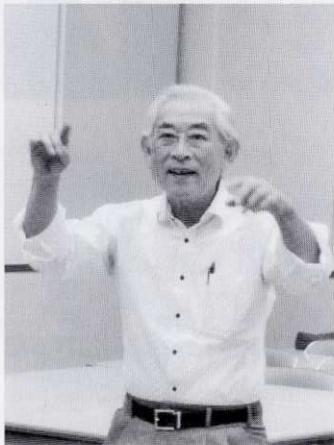
啄木の望郷のこころ

石川啄木は20歳で故郷・渋民村の渋民尋常高等小学校の代用教員を拝命する。しかし1年後には校長排斥運動を起こして辞任(免職)、一家離散して、自身は北海道へ渡る。さらに1年後には上京して、窮屈の中で執筆活動に打ち込むが、故郷の岩手の土を踏むことは二度となかった。

啄木の故郷を偲ぶ心は人一倍強く、「かにかくに渋谷村は恋しかり おもひでの山 おもひでの川」をはじめ多くの望郷の歌が知られている。しかしそのいずれもが岩手の山や川を懐かしむ歌であり、故郷の人々に対しては頑なに心を閉ざし続けた。それは、「石をもて追はるごとく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆる時なし」の歌に集約されているが、

歌集ではこの歌の直後に「やはらかに柳あをめる」の歌が置かれているのを見れば、故郷に背を向け続けながら故郷の山川を泣かんばかりに想う、啄木の胸の内の葛藤、すなわち「男の弱さ」に肅然とさせられる。

～Profile～



指揮者 梶山 英機

1965年 名古屋大学経済学部卒業
在学中名古屋大学男声合唱団指揮者をつとめる
1965年 名古屋労音コーラス入団
1976年 名古屋市民コーラスに改名
以降現在に至るまで団内指揮者をつとめる
現在 市民の第九コンサート合唱指導
愛知合唱協会理事
名古屋男声合唱団指揮者

男声合唱団「昴」

“合唱の原点はアカペラ”を旗印に仲間が集まって設立してより15年目を迎えます。団員の平均年齢は年々高まって70歳を超えてますが、最近では50歳台の仲間も加わって、気持ちの若さを維持しています。設立時の指揮者・山田正明氏が2006年に体調不良となつたため梶山英機氏に指揮を引き継いで頂き、明るい人柄で信頼を集めつつ、发声の強化が図られ、アカペラ男声合唱の醍醐味を追求しています。

「男声合唱ジョイントコンサート」には初回から参加し、また4年前からは「市民会館シニアコーラス交歓発表会」、「愛知県合唱祭」にも出場しているほか、不定期ですが「サロンコンサート」の企画もあります。年齢を問わず、音楽と人の交わりを楽しみたい方の見学・入団を歓迎します。

メンバー

T1

磯野 正敏
大池 廣
志田 勝久
林 洋司
松尾 純一

T2

井上 勝夫
岩見 雅夫
岩元 淳一
近藤 節夫
酒井 哲夫
堀田 和宏
横井 保夫

B1

江口 允春
大原 功
佐竹 伸介
戸田 省二
畠 龍輔
藤野 優男
古瀬 紀久

B2

大橋 正佳
岡村久之助
近藤 実
高木 桂
丹羽 康人
野並 純三

ホームページ <https://sites.google.com/site/choirsubaru/home>

[連絡先] Tel & Fax: 0568-91-2225 (高木) / 定期練習: 毎週月曜日 18:30 ~ 20:30

練習会場: 中部電力東桜会館(地下鉄新栄町、高岳両駅から徒歩5分) / 会費: 月2000円

III クール・ジョワイエ

[西村 朗 作品より]

クール・ジョワイエが作曲家西村 朗氏(以下西村氏)の作品と初めて出会ったのは2001年、「かつて信仰は地上にあった」であった。その後ジョワイエは2011年の創立40周年演奏会で西村氏の個展を開き、現在までに委嘱を2作品(+アンコールピース1曲)作っていただけた幸運に恵まれた。

今回のジョイントでは西村氏の世界を味わっていただくべく、委嘱2曲を含む3曲を選曲した。どれも西村氏の想いが凝縮されたすばらしい作品である。ジョワイエもその想いを精一杯伝えるべく演奏をしたい。

同声合唱とピアノのための組曲「夏の庭」より

「夏の庭」(2009)

本曲は、いくつかの幸運と必然が重なって生まれたものといえる。テキストは西村氏に一任したが2008年に詩人佐々木幹郎氏との出会いにより生まれたのが本曲である。西村氏は本曲を起点として一連の連作(「大空の粒子」(2010)「島の国」(2010))を発表され、その意味でも記念すべき曲となった。

今回取り上げる「夏の庭」は、3曲からなる組曲の1曲目である。冒頭の「あれは　あれはどこへ」とfで歌い上げる部分は鮮烈な印象を残し、40周年の演奏会では聴衆を“西村ワールド”へ一気に引き込んだ。

男声合唱組曲「まぼろしの薔薇」より

「ひびきのなかに住む薔薇よ」(1984)

『この合唱組曲のテキストは、大手拓次の詩集『藍色の墓』の中の「みどりの薔薇」から採りました。全曲を支配する“まぼろしの白薔薇”的イメージは(萩原)朔太郎のいう“阿片の夢の中の夢魔の月光”的であり、“純潔”であるとともに“悩ましいエロチズム”をただよわせる、“幻想の部屋”に咲く白薔薇のそれなのです。貧しく狭い詩人の下宿に夜ごとひらく白薔薇、そのまぼろしの中で官能の狂気にうちふるえ、陰と陽の狂気の境をさまよいながら、ついには“死”に似た官能の喜悦のうちにカタルシスをむかえとじられてゆく“妖気”にみちた詩人の夢。この組曲はその夢を描こうとしたものです。』
(カワイ出版楽譜扉より抜粋)

今回取り上げる「ひびきのなかに住む薔薇よ」は5曲目、終曲となる。詩人大手拓次が見る“まぼろしの白薔薇”。最後は冒頭(1曲目)のモチーフが使われ、幻影だけでなく薔薇の香りが“にほつて”きて、クライマックスでもはや現実との区別がつかなくなるような官能の世界がうたわれる。

同声三部合唱曲

「ゆうぐれ」(2011)

40周年演奏会のアンコール・ピースとしてお願いしていたのがこの「ゆうぐれ」である。詩は西村氏の合唱作品の原点とも言える大手拓次より採られた。作曲の時期が東日本大震災と重なり、楽譜末尾には「慰靈の思いとともに」とのただし書きがある。一方で西村氏のレッスンを受けた際、『決して感情的に歌わないで』と注意されたのを思い出す。

最後のヴォカリーズ部分は夕暮れの淡い情景と死者を弔う西方浄土が重なり、そしてこれからも生き続ける(歌い続ける)残された私たちの思いが込められているように感じる。

~~Profile~~



指揮者 高橋 寛樹 (たかはし ひろき)

愛知県立芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業、同大学院修了。
藤井賀寿恵、上原興隆、宇都宮淑子、オスカー・ケーベル、ジェルメール・ムニエの各氏に師事。
合唱の伴奏をはじめ、声楽、器楽などとも幅広く活動。
現在、名古屋短期大学、名古屋音楽大学、同朋高等学校非常勤講師。
「クール・ジョワイエ」のほか「シティーエコー知多」「アンサンブル デ ソナリテ」「新日鐵名古屋合唱団」を指導。



ピアノ 森 恵美子 (もり えみこ)

名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。
第12回日本ピアノ教育連盟ピアノオーディションにおいて全国大会入選。及び、パスカル=ドヴァイヨン氏のレッスンを受ける。
第11回春日井市音楽コンクール第1位、及び中日賞受賞。
第1回ペトロフピアノ国際コンクール・連弾部門において奨励賞受賞。
第9回ベストプレイヤーズコンクールにおいて優秀賞受賞。同受賞者演奏会出演。
これまでに、廣瀬恵子、久保みち、笠間春子の各氏に師事。
現在、同朋高等学校、東海学園大学、及び岐阜聖徳学園短期大学部各非常勤講師。岡崎音楽家協会会員。

クール・ジョワイエ

1971年10月に10数名のメンバーで創立。高須道夫を常任指揮者に迎え、一貫して「良い音楽」を求めてきた。選曲方針として(1)ヨーロッパの音楽的中心地で時代を遡った作品、(2)ヨーロッパの音楽的中心地から地理的に離れた国の作品、(3)日本の作品を掲げて委嘱活動にも取り組んでいる。生み出した作品は戸島美喜夫「もどりうた」(1981)、「いくさ三題」(1990)、三善晃「いのちのうた」「へんしんのうた」(1993)、西村朗「夏の庭」(2009)、「旅-悲歌が生まれるまで」「ゆうぐれ」(2011)。また、名古屋を中心とする地域の活動や、他合唱団との交流も積極的に取り組んでいる。

2008年より桂冠指揮者に高須道夫、常任指揮者に高橋寛樹の新体制をスタートした。

1985年、1986年、1987年、1988年、1997年に全日本合唱コンクール全国大会一般の部金賞受賞。

2011年秋に創立40周年演奏会を開催し、名古屋市民芸術祭2011特別賞、愛知県合唱連盟より藤井賞を受賞。

メンバー

- T1 山口力、浅井裕之、吉村宏之、川井基義、山本政紀、山田正樹☆、安藤彰浩☆、村瀬大典
T2 安藤徳、福本忠弘、津田孝治、松本茂生、河合伸和、澤田正浩、中武英樹、藤田敏夫、早川充利、杉本卓哉、
加藤悠雅
B1 柴田富造、鈴木紘仁、坂井明彦、高橋敏明、鈴木章照、神田邦彦、中井栄、戸島準一郎☆
B2 中野淳司、伊藤健太郎、長谷川稔、鈴木敏秋、武内康展、横川享市、立花俊夫☆ (☆=今回不参加)

● 団員募集 ●

指揮者：高須道夫 高橋寛樹 / 練習日：毎週木曜日7:00PM ~ 9:30PM

練習場：名古屋市音楽プラザ(金山)・大竹書店(鶴舞)他 / 団費：月額4,500円(学生2,000円)

連絡先：松本茂生 TEL: 0568-32-3908 / ホームページ：http://music.geocities.jp/choeurjoyeux_neo/index

お知らせ：本日ロビーにて「創立40周年クール・ジョワイエ演奏会」CD販売いたします(本日の演奏曲も収録)。

IV 男声合唱団響

男声合唱組曲

「月光とピエロ」

堀口大學 作詩／清水脩 作曲

[男声合唱について]

清水脩

私の合唱作品は編曲なども加えると400曲ぐらいになる。先年必要があって調べ出したが、めんどうになってほうりだしてしまった。しかし必要までが解消したのではない。そこで千葉大の山本金雄君に調査を依頼した。というのは、同君は前々から邦人合唱作品の研究をしていたし、作品も集めてもいたからである。そして調べ上げられた数が前述のとおりである。気がついてみると、半数近くが男声合唱であった。

何故男声合唱曲が多いのか。また何故男声合唱を書くのか。答えは簡単である。私が合唱に頭を突込んだ最初は男声合唱だったし、以来ずっと男声合唱をうたい、男声合唱を指揮することが多かったからである。合唱体験の数も年月も多かった。作品を書き、演奏する機会もこれだけ多かった。混声合唱や女声合唱よりも、親しいもののように、私には写ってきた。しかし、だからといって、男声合唱を合唱形態最上のものと考えたことはない。ただ、私の身近かに男声合唱団が常に存在したにすぎない。しかもそのすべてはアマチュアであった事も、私にとって仕合せであった。アマチュアのかれらは、音楽そのものに対して、純粋すぎるほど純粋であった。私に、からだごとぶつかってくる、その行動性は私の創造欲を刺激するのであった。

「月光とピエロ」は代表作と人はいう。しかし、もし東京男声合唱団というアマチュアの団体を私が指揮していなかつたら生まれなかっただろう。「黙示」「阿波祈禱文」「大手拓次の三つの詩」「智恵子抄巻末の歌六首」などの諸作も、東海メールクワイアなしでは書かれなかつたにちがいない。同じように、「アイヌのウポポ」は立教大学グリークラブ、「最上川舟歌」は早大グリークラブ、最近作「日本の祭」は慶應ワグネル・ソサイエティ男声合唱団という風に、私を動かして書斎から巣立っていった。すべて、アマチュア合唱団である。

私はいつでもすぐれた合唱団に囲まれている。言ってみれば幸いな作曲家である。

Victor「日本の合唱名曲選II」ジャケットより

[月光とピエロ]

清水脩

昭和23年(1948年)といえば、敗戦後の混乱が最も甚しい頃であった。私はそれまで、仕事の中心を音楽評論においていたのを、作曲の方に移しかえてからまだ間もなかった。その前々年、日本合唱連盟というのが組織され、私はその組織づくりに奔走していた。もともと合唱好きの私の事だから、作曲というとまず合唱作品の方に傾くのであった。折りしも、合唱連盟の第3回コンクールで初めて課題曲の募集も行うことになった。私は連盟の主筆でもあったが、それに応募し、当選したのが、この組曲の中の第2曲<秋のピエロ>であった。幸い、この曲は課題曲としては大変好評だった。その頃、私は東京男声合唱団というアマチュアの合唱団を指揮していた。そこで、堀口大学のピエロをうたつた詩の中から、さらに四つを選び、次々と作曲した。それは昭和24年初頭以後の事である。　・・・(中略)・・・それはさておき、<月光とピエロ>は、詩を読んでいただければわかるように、敗戦の混乱で、人々は明日の食料を求めてさまよい、絶望のうちに立っていた当時の人々に、意外の共感をよんだ。深い悩み、遂げられぬ恋、そして耐えがたい絶望感。ピエロはそれでも、異様な衣装に身を包み、真白く顔をぬりつぶし、こつけいな身振りと笑顔をつくり、舞台に立たなければならぬ。ピエロならずとも、人間はいつの時代でもこのような悲しい一面を持っているのではないかろうか。ことに、青年のある時代にはこのような絶望感におそれないものはないのではないかろうか。この男声合唱組曲が、発表時から今日に到るまで、高校合唱団や大学合唱団、あるいは若い男性のグループの間で、強い共感をもって迎えられ、歌われているのは、その故であろうと思っている。

五つの曲は、緩急の配合を考えて、組合せたのはいうまでもない。しかし、この組曲では高いHからバスのEsまで、男声合唱としてはかなり広い音域を持っているので、通して演奏するにはかなりの力量が必要である。ハーモニーはごく単純ではあるが、重厚なもの、軽快なもの、明るいもの、暗いものという風に、色彩的なハーモニーを実現しなければならない。

DENON「日本の合唱曲」ジャケットより

I 月夜

月の光の照る辻に
ピエロさびしく立ちにけり。

ピエロの姿白ければ
月の光に濡れにけり。

あたりしみじみ見まわせど
コロンビイヌの影もなし。

あまりに事のかなしさに
ピエロは涙ながしけり。

ピエロの白さ!
身のつらさ!

ピエロの顔は
真白け!

白くあかるく
見ゆれども

ピエロの顔は
さびしかり!

III ピエロ

ピエロの白さ!
身のつらさ!

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
踊りけり、
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
歌いけり、
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
歌いけり、
ピエロ、ピエレット。

V 月光とピエロと
ピエレットの唐草模様

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
踊りけり、
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
歌いけり、
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
歌いけり、
ピエロ、ピエレット。

泣き笑いしてわがピエロ
秋じや！ 秋じや！ と歌うなり。
○の形の口をして
秋じや！ 秋じや！ と歌うなり。

白くあかるく
見ゆれども

月の光は
さびしかり！

IV ピエロの嘆き

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。
月の光に照らされて。

身すぎ世すぎの是非もなく
おどけたれどもわがピエロ
月はみ空に身はここに、
秋はしみじみ身に滲みて
真実涙を流すなり。



~Profile~



指揮者 後藤 行央

愛知大学男声合唱団にて指揮者デビュー。大学在学中に辻正行氏の薰陶を受ける。卒業後マイナードの指揮者を経て現在に至る。「プロ顔負けのプロ」「孤高の人」「非凡な音楽センスの持ち主」などこれまでマエストロ・後藤を形容する言葉に偽りはない。そんなクールなマエストロ・後藤が何故「響」とともにあるのか。
それは、ひとえに「響」で歌いたいという団員がいるからにはかならない。
「…私はいつでもすぐれた合唱団に囲まれている。言ってみれば幸いな作曲家である。」と作曲者は言う。マエストロ・後藤を「幸いな指揮者」と言わしめるのは、「響」の団員我々にはかならない。

男声合唱団 韶

学生時代の甘美な思いを忘れることがないメンバーが第1回愛知七大学男声合唱連盟演奏会の開催をきっかけに1985年11月30日長円寺会館にて最初の練習を行う。1987年6月に第1回演奏会を開催、今年1月19日に第26回の演奏会を終えた。林光氏の委嘱作品「帆は風に鳴り」は第57回全日本合唱コンクールの課題曲として取り上げられた。

大声で歌うこと純粋すぎるほど純粋であった?我々も創団時の約2倍のメンバーを擁するいま、そろそろ音楽に対し純粋にならなければいけないと感じている。本日演奏する「月光とピエロ」は、第1回演奏会で演奏した曲である。これから「響」を考えるいい機会になればと思っている。

男声合唱団「響」ホームページ: <http://www.geocities.co.jp/MusicHall/1632/index.html>

V 東海メールクワイア

男声合唱組曲

「残照」より

井上 靖 作詩／高田 三郎 作曲／今井 邦男 編曲

2. 凫

3. 比良のシャクナゲ

5. 残照

指揮：鈴木 順／ピアノ：津野 有紀

高田三郎最晩年期に作曲(1995年)された11番目にして最後の傑作歌曲組曲「残照」は、井上靖と高田三郎に共通する北方的感性が見事に結実した作品である。

男声合唱組曲(全5曲)は、東海メールクワイア第53回定期演奏会(2010年6月)において、編曲・指揮：今井邦男、ピアノ：高田江里により初演された。

井上靖の4つの詩集から選ばれた散文詩によって構成される本組曲の主題は『人生のある時期に達して、あるいは過去を振り返り、あるいは生涯の夕暮れを想う感慨』(高田三郎)であり、本日は全5曲の中から、生と死と同じに生きる人生の両儀性をうたう第2曲「凧」、人間の存在そのものが持つ透徹した悲哀が主題の第3曲「比良のシャクナゲ」、人生終焉の深い感慨である第5曲「残照」の3曲を演奏する。

2. 凧

子供達はだんだん畠で凧を揚げた。烈風にあおられ、どの凧もくるくると周りながら揚がって行く。揚がらないのは私の凧だけだった。いくら糸をくれても、私の凧だけは真っ逆さまに落ちて来て、田圃の黒い土の霜柱の中に突き刺さった。

遠い少年の日よ。風の中に散る白い冬の陽のきらめきよ。今にして思うと、私の揚げていたものは、凧ではなくて“孤独”だったのだ。いや、“孤独”ではなくて“死”であったのだ。私は烈風の中に“死”を揚げていたのだ。そして、田圃の稻の切株の上を駆けては、無慚に突き刺さっている“死”を拾っていたのだ。

3. 比良のシャクナゲ

むかし「写真画報」という雑誌で“比良のシャクナゲ”的写真を見たことがある。そこははるか眼下に鏡のような湖面の一部が望まれる比良山系の頂きで、あの香り高く白い高山植物の群落が、その急峻な斜面を美しくおおっていた。

その写真を見た時、私はいつか自分が、人の世の生活の疲労と悲しみをリュックいっぱいに詰め、まなかいに立つ比良の稜線を仰ぎながら、湖畔の小さい軽便鉄道にゆられ、この美しい山嶺の一角に辿りつく日があるであろうことを、ひそかに心に期して疑わなかった。絶望と孤独の日、必ずや自分はこの山に登るであろうと一。

それからおそらく十年になるだろうが、私はいまだに比良のシャクナゲを知らない。忘れていたわけではない。年々歳々、その高い峰の白い花を瞼に描く機会は私に多くなっている。ただあの比良の峰の頂き、香り高い花の群落のもとで、星に顔を向けて眠る己が睡りを想うと、その時の自分の姿の持つ、幸とか不幸とかに無縁な、ひたすらなる悲しみのよくなものに触れると、なぜか、下界のいかなる絶望も、いかなる孤独も、なお猥雑なくだらぬものに思えてくるのであった。

5. 残照

一日の終りに夕暮れがやって来るよう、一と、そんな思いが私を捉えた。落日の残照で真っ赤に燃えた土屋の集落を通過した時だった。一日の終りに夕暮れがやって来るよう、私の生涯にもいま夕暮れが来ようとしている。無人の路地で驢馬が燃え、無人の十字路で駱駝が燃え、くるまは再び砂漠へはいってゆく。砂漠もまた赤く燃えて。

~Profile~



指揮者 鈴木 順 (すずき すなお)

東海メールクワイアに第20回定期演奏会(1974年)から参加。稲葉祐三、植松峻、永友博信ら3人の常任指揮者の指導を受け、1989年に常任指揮者制度を廃止したときから団内指揮者に就任、大中恩、高田三郎、三木稔、新実徳英ら作曲家自身が自作を指揮する演奏会や、須賀敬一、松原千振、畠中良輔、田中信昭などの客演指揮者の練習における下振りを務めている。また、2007年以降は北海道、仙台、東京などで行われた演奏会で指揮を担当するなど、本番で指揮をする機会も多くなっている。2010年5月にはイタリアへの演奏旅行において、東海メールクワイアを指揮し、ローマの聴衆からも好評を博した。現在、日本男声合唱協会(JAMCA)事務局長。



ピアノ 津野 有紀 (つの ゆき)

名古屋市立菊里高等学校音楽科にて山上豊氏、愛知県立芸術大学音楽学部ピアノ科にて兼松信子氏、ドイツ国立ミュンヘン音楽大学に於いて、オスカーケーベル、アルフォンスコンタルスキーの各氏に師事。現在、東海メールクワイアでピアノを担当。

東海メールクワイア

1946年6月、名古屋市昭和区にある東海教会を拠点として創立。

定期演奏会は、1952年に第1回を開催、全日本合唱コンクールにも積極的に参加し、1960、64～66年と優勝。1968、71年には芸術祭奨励賞を受賞。邦人作品委嘱にも力を注いでおり、1959年に清水脩「青い照明」(初演は「宮沢賢治の五つの詩」)を皮切りに2005年信長貴富「くちびるに歌を」まで委嘱作品は36曲に及ぶ。

1971年10月、男声合唱界の振興を目的に全国の有力合唱団と協力し、日本男声合唱協会(JAMCA)を設立。1997年に事務局を引き受けたのを機に、全国展開する組織に改編し(会員数: 団体53・個人会員46名)、演奏会も北海道から九州(大分市)まで全国11都市で開催し、本年7月の信州演奏会で21回を数える。

本年5月には、ローマ・カトリック総本山ヴァチカンから招待されるという栄誉に授かり、サンピエトロ大聖堂で行われる莊嚴ミサにおいて500年の歴史を誇るジュリア聖歌隊と共に演する予定。6月23日には芸術劇場コンサートホールで、第56回定期演奏会(生誕100年記念「高田三郎作品特集」)を行う。

メンバー

- T1 神谷泰朗、村瀬輝恭、永岡衛、橋本真一☆、瀧谷直衛☆、北井一夫、豊田千之☆、深谷幸弘、藤田治樹、
杉江正裕、小島好美☆、金子英二☆
- T2 藤沢尊之☆、中鳩暁、奥村祐一、永井雄治、嶋田浩文☆、長野和夫、木村博哉、高木秀一、森健次、山田典男、
金子剛史☆、金森譲
- B1 都築義高、沢田英一、間瀬泰得、井部修、島貫秀淳☆、水貝英明☆、徳永達弥、山田潤、三宅鴻☆、
川瀬治通☆、志村友訓、萩原脩、勝田篤司、吉川悟一郎、米澤正治
- B2 水谷清☆、鈴木順、大塚康徳、片山和弘、清水一郎、行松敏明、落合良則☆、加納高志☆、塩田保、曾我雄司、
森田良夫☆、来川眞治、牧伸夫、辻純一郎、高見は久
(☆=今回不参加)

ホームページ <http://choir.jpn.ph/tmc/>

[連絡先] 杉江正裕 E-mail: mahito-sugie@wi.kualnet.jp FAX: 0568-35-0802 (川瀬)

定期練習: 毎週木曜日19:00～21:00 / 練習会場: 愛英幼稚園(地下鉄今池駅徒歩5分)

会費: 月3,500円(学生1,000円) / 入会金: 3,500円

VI グランフォニック

男声合唱とピアノのための

「運命の歌」

Johannes Brahms 作曲／北村 協一 編曲

「 Brahms はお好き? 」と質問されたら、あなたは何と答えますか?

1833年生まれのヨハネスに直接会ったことはありませんが、彼に係った人たちの記録からすると、頑固で、一途で、理屈っぽく、でも純粋で、慈悲深い… そんなイメージが浮かび上がります。まさに彼の作品そのものと申せましょう。また、誤解され易い人でもあったようです。リヒアルト・ヴァグナーら新ドイツ派から目の敵にされたのも、そんな彼の性格に起因しているのかも知れません。どちらも、母国ドイツを愛し、これほどまでにドイツ的な思考とドイツ的作品を残しているというのに。当時の文化人たちの間では、冒頭の質問は結構深い意味を持ったのではないかでしょうか。

1883年、ちょうどヨハネスが50歳の年に自分を口撃したヴァグナーは亡くなりますが、合唱団の指導中にその知らせを聞いたヨハネスは、「大家は死んだ。今日はもう何も歌えない」と、スコアをそっと閉じたそうです。これもヨハネスの人となりをよく表した逸話です。

さて、後世の私たちから見れば、1868年というのはヨハネスにとって人生の転機となります。その年に全曲を完成させた《ドイツ・レクイエム》が大成功を収め、苦しかった彼の生活を一変させたからです。そして、その前年に、本日演奏する《運命の歌》がひそりと着手されているのです。

静謐で平和と安らぎに溢れる天上の世界(前半部)に対し、苦痛に満ちた自分たち人間の世界(後半部)。ヨハネスは、こうした苛立ちのまま自分の音楽を終わらせることを善しとしませんでした。《ドイツ・レクイエム》と同様に、今を生きている我々にも安らぎはあるべきだと強い思いから、絶望的な詩の後に“救いの音楽”を付け加えています。原曲ではオーケストラのみで演奏されるこの“救い”を、本日我々はヴォーカリゼーションを加えて表現してみます。

Brahms? もちろん、ちょっと気難しいけれど、心優しい彼の作品は大好きです。

(M.N.)

Schicksalslied

Ihr wandelt droben im Licht
Auf weichem Boden, selige Genien!
Glänzende Götterlüfte
Rühren Euch leicht,
Wie die Finger der Künstlerin
Heilige Saiten.

Schicksallos, wie der schlafende
Säugling, atmen die Himmlichen;
Keusch bewahrt
In bescheidner Knospe
Blühet ewig
Ihnen der Geist,
Und die seligen Augen
Blicken in stiller,
Ewiger Klarheit.

Doch uns ist gegeben
Auf keiner Stätte zu ruhn;
Es schwinden, es fallen
Die leidenden Menschen
Blindlings von einer
Stunde zur andern,
Wie Wasser von Klippe
Zu Klippe geworfen,
Jahrlang ins Ungewisse hinab.

Friedrich Hölderlin

ヒュベーリオンの運命の歌
ヘルダーリン（檜山哲彦訳）

おんみらはかの高みのひかりのなか、
やわらかな地をめぐり歩む、浄福の精霊たちよ！
かがやく神々の氣は
かろやかにおんみらに触れゆく、
楽人のたおやかな指が
聖なる絃（いの）に触れるごとく。

嬰兒（いどり）の眠るに似て、天上のものらは
運命（うみやう）を離れて息をつかい、
つつましい苔（つばみ）のうちに
けがれなくまもられ、
その精神（じしやう）は
永久（ひしゆう）に花と咲きさかえ、
浄福の眼（まなこ）は
とこしえの静かな明るさ
のうちにかがやく。

だが、われらの宿命（しゆめい）とは
いすこにもやすらいえぬこと。
過ぎ去り、落ちてゆく、
苦しみ悩む人間は、
盲（めい）いのままに一刻より
また一刻へ、とめあえず、
岩礁より岩礁へ
なげうたれる水のごとく、
はてもなく、行方知られぬところへと。

~Profile~



指揮者 成田 正人

グラントフォニック創設メンバーで指揮者。交声合唱団ミューザヴォーチュ指揮者。上海グリークラブ名誉指揮者。慶應義塾大学ワグネル・ソサイエティ在籍中、故・木下保氏、畠中良輔氏らの薰陶を受け、指揮法を伊藤栄一氏に師事。学生時代から合唱指揮の傍ら作詞・作曲・編曲に勤しみ現在に至る。編曲モノは数知れず、シナリオ起しから作曲まで自ら手掛ける創作音楽物語形式の作品も多数。代表作に、男声合唱三部作:『パパの子守歌』『絵描きと少年』『不破白人の恋』、盲導犬支援委嘱作『ハーネスで握手!』、常滑音楽祭委嘱作『ブチ・ハラハの謎』、華音の会委嘱作『歌うは愛する人のわざ』等々。最近作の『太郎の愛』『エリーの青春』も好評であった。



ピアノ 丸山 晶子

名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部演奏学科を卒業。2004年よりニューヨーク・マネス音楽院に奨学金を受け留学。同音楽院修士課程及びプロフェッショナルスタディース・ディプロマコース修了。浜離宮朝日ホールにて桐朋学園大学ピアノ科卒業演奏会に出演。第25回読売中部新人演奏会、第11回桐朋学園同窓生によるサマー・コンサート、第6回セントラル愛知交響楽団室内楽シリーズ等に出演。2008年ニューヨーク・スタインウェイホールでのソロリサイタルをはじめ、2008年、2010年宗次ホールにてソロリサイタル開催。2009年に帰国。現在東京・名古屋地区を中心に演奏活動を行っている。名古屋音楽学校講師。

グラントフォニック

19年前、十数人でスタートしたグラントフォニックは、常に音楽を通して生きる喜びを伝えたいと歌い続け、今では20代から80代までの60名近い団体に成長しました。その間、私たちを応援して下さる皆様のおかげで、昨年11月第11回定期演奏会を終え、また新たな第一歩を踏み出すことができました。オリジナリティーを基本に、これまで、定期演奏会毎に発表してきた創作曲や独自に編曲した作品は数知れず、それは私たちの財産であり誇りであると思っています。平均年齢は優に60歳を超えてますが、私たちがステージで楽しく輝いていれば、皆様にもきっとそれは伝わり、生きる喜びを感じてもらえるはずだ、そんな思いで日々練習に励んでおります。

<<http://www.granphonic.com>>

メンバー

- T1 佐々木正義、三ツ松平、鹿住誠、伊藤高潤、小林武、鈴木英孝、浅井裕之、黒岩実、小宮俊英、二神晃、榎本真丈、石川周二、高津眞司
T2 柴田道昭、三ツ口勝弥、石井清、成田正人、間瀬譲、飯田公男、佐藤正、中村嘉夫、大浦亮一、松浦治徳、根木和彦、河内幸雄、大村元
B1 弘瀬嘉夫、永井一美、神田久嗣、細江太喜雄、伊藤慎二、早澤信昭、水野邦明、安田俊哉、芝木昌一、鈴木清次
B2 井ノ口貴敏、外村俊夫、稻熊裕之、藤山祐司、松原成憲、村井襄介、間瀬裕士、犬塚弘道、小嶋聰、鈴木秀樹、成井詔彦、木村文隆、村上信



VII 合同演奏

多田武彦作品集より

1、柳河風俗詩	「柳河」	北原 白秋 作詩
2、草野心平の詩から	「石家荘にて」	草野心平 作詩
3、雨	「雨」	八木重吉 作詩
4、富士山	「作品第貳拾壹」	草野心平 作詩

柳 河

もうし もうし 柳河じや 柳河じや
銅(かね)の鳥居を見やしゃんせ
欄干橋を見やしゃんせ
(馴者は喇叭の音をやめて
赤い夕日に手をかざす)
薊の生えた その家は その家は
舊(ふる)いむかしの遊女屋(ノスカイヤ)
人も住まわぬ遊女屋(ノスカイヤ)

裏のBANCOに居る人は……
あれは隣の継娘継娘
水に映ったそのかけは
そのかけは
母の形見の小手毬を
小手毬を
赤い毛糸でくるのぢゃ
涙片手にくくるのぢゃ

もうし もうし 旅のひと
旅のひと
あれ あの三味をきかしゃんせ
鳩(には)の浮くのを見やしゃんせ
(馴者は喇叭の音をたてて
赤い夕日の街に入る)

夕焼小焼
明日天気になあれ

石家荘にて

茫々の平野くだりて。
サガレンの。
潮香かぎし女。

月蛾の街にはひり来れり。

白き夜を。
月蛾歌はず。
耳環のみふるへたり。

ああ。
十文字愛憎の底にして。
石家荘。
沈みゆくなり。

雨

雨のおとが きこえる
雨がふっていたのだ。

あのおとのように そっと世のために
はたらいていよう。

雨があがるように しづかに死んでゆこう。

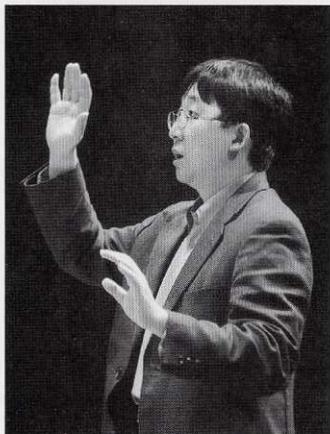
作品第貳拾壹

平野すれすれ
雨雲屏風おもたくとざし
その絶端に
いきなりガッと
夕映の
富士

降りそそぐそそぐ
翠藍ガラスの
大驟雨

～Profile～

指揮者 伊東 恵司



90年以降多数の合唱団で合唱指導を開始。全日本合唱コンクールでは「なにわコラリアーズ」の10年連続金賞を始め複数の合唱団で17個の金賞を受賞。宝塚国際室内合唱コンクール20周年記念大会では海外の団体をおさえ総合グランプリを獲得している。現在は、全国各地で審査員や合唱指導を引き受けるほか「アルティ声楽アンサンブル」「コーラスめっせ」等の新規の合唱フェスティバル、学生指導者合宿の企画や主催を行っている。大阪府・京都府合唱連盟理事、日本合唱指揮者協会関西支部事務局次長。11年カワイ出版より「スチューデントソングブック(共編著)」を上梓。日本男声合唱協会個人会員。

メッセージ

合唱指揮者 伊東 恵司

多田作品の魅力は、まず、そういった詩人や詩の選び方、「これしかない」という「詩の選択眼」とも言うべきものから成立しているのではないでしょうか。まるで、あたかも詩の中に内在していたとしか思えない歌や音楽を見抜き、それに忠実にメロディーとハーモニーを紡いでいるようにも思えます。本日も演奏します「柳河」をはじめとする私の大好きな一連の白秋のテキストに作曲された作品などは、詩の源に存在する白秋の官能性や背徳感、逃避的傾向、浪漫的傾向がフォルムを崩さない様式の中に表現されており、そのアンビバレンツな状態が我々の日常的感性の中に共感を持って表現されるという点で、多田芸術の真骨頂とさえ思えます。

さて、私の指揮しております「なにわコラリアーズ」という大阪の男声合唱団では、「男声合唱の世界に新しい息吹を」というキャッチフレーズでコンクールを軸に活動してきましたので、一時期多田武彦作品を封印しながら、北欧の現代曲を中心とする新しいレパートリーに積極的にチャレンジしていました。しかしながら、コンクール撤退後、何をしようと考えたときに、もう一度日本語と大好きな多田武彦作品に向き合いたいと考え、「ただだけだけコンサート」と銘打ってオール多田武彦作品の演奏会を開催してきております。出来るだけ過去の名演奏に縛られないで、楽譜だけを見て演奏をすることを心がけた「ただだけだけコンサート」はおかげさまで3度を数え、本家多田先生からも最大級の賛辞の言葉をいただき喜んでもらっております。(vol.1ゆかりの京都で開催、vol.2は山口にて中原中也の詩ばかりを集め、vol.3は金沢で北陸に関係するプログラムを組んできています。…このコンサート次は北海道を計画中です。曲は予想出来ますよね?現地団員も募集しています)

さて、今回は、みんな大好きな超有名曲4曲を立て続けに歌うという贅沢を味わえます。それぞれのテイストを考えながら、言葉と雰囲気を大切に新しいメンバーで新しい「ただだけ音楽」を作りたいと考えています。

合同ステージ公募参加者

- T1 相澤英敏、磯田桂司、井上節夫、臼井豊、川村信行、小林滋太、佐竹正良、祖父江秀明、辻巻裕、幸秀光
T2 石原靖章、小林一元、竹内範善、富田久康、松本治良、安井正彦
B1 浅井崇幸、石川進、大木昌生、西河秀人、野村浩、山野井正道
B2 安藤和之、池田和彦、伊藤幹男、倉田友貴、後藤秋生、寺田充孝、稻葉文典



男声合唱 ジョイントコンサート

第3回

出演団体と演奏曲

- ・ SINGERS なも Antonio Lotti
「Messa a 3 voci in La minore」
- ・ 男声合唱団「昴」 信長 貴富 「見よ、かの蒼空に」
- ・ クール・ジョワイエ 西村 朗 「夏の庭」他
- ・ 男声合唱団「響」 清水 僕 「月光とピエロ」
- ・ 東海メールクワイアー 高田 三郎 「残照」
- ・ グランフォニック ブラームス 「運命の歌」

合同演奏曲：多田武彦作品集より 指揮 伊東 恵司

- ・ 柳河風俗詩 「柳河」
- ・ 草野心平の詩から 「石家荘にて」
- ・ 雨 「雨」
- ・ 富士山 「作品第貳拾壹」

2013 3/17 [日] 15:00 開演
(14:15 開場)

場 所 愛知県芸術劇場コンサートホール

入場料 2,000円 (全自由席)

主 催：男声合唱ジョイントコンサート実行委員会

後 援：愛知県合唱連盟、朝日新聞社

お問い合わせ：実行委員（福本忠弘）(052)551-0531